

〔論文〕

## グラムシ「実践の哲学」の形成 —Q8「哲学メモ」の展開—（上）

川 上 恵 江

**La formazione della “filosofia della prassi”.**

**Lo sviluppo degli appunti filosofici del quaderno 8.**

Satoe KAWAKAMI

### 要旨

アントニオ・グラムシ『獄中ノート』における一連の哲学研究のなかで、一次執筆の草稿を多く含む第8ノートの「哲学メモ、唯物論と観念論。第3シリーズ」をとりあげ、その執筆順再構成をおこなうことによって、グラムシが提示する「実践の哲学」（広義にはマルクス主義、狭義にはマルクス主義哲学）の特質を明らかにする。さらにそれをつうじて、『獄中ノート』に展開される思想のリズムをつかみだし、『獄中ノート』全容解明への足がかりをえようとところみる。本稿では、紙数の関係上、第8ノートに収録されている74アイテムの哲学草稿のうち、前半の37アイテムをとりあげ、後半については次号で論じることとする。

キーワード グラムシ、実践、マルクス主義、歴史主義、イタリア、哲学、唯物論、観念論

### はじめに

20世紀イタリアのマルクス主義思想家、アントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci. 1891－1937年）は、1926年、ファシズムの官憲によって捕らえられ投獄されたのち、獄中で33冊におよぶノートを記す。このノートが彼の死後、ファシズム政権が倒れたのちに『獄中ノート』として出版されて、人々の注目を集めるようになる<sup>1)</sup>。その後グラムシへの関心は国際的な広がりを見せ、今日では、かれが生前かかわっていた政治や労働運動の領域のみならず、社会・文化の諸問題にかんする研究分野からも、幅広い関心が寄せられつづけ

ているのである。『獄中ノート』で展開されたグラムシの考察は多分野にわたっており、このことがさまざまな学問領域からのグラムシへの接近を可能にして研究のひろがりを促進するが、それは同時に、グラムシ思想の全体像をつかみにくくする一因にもなっている。

しかし言うまでもなく、きわめて独創的といわれ、人文・社会科学諸分野の理論に影響を与えつづけているグラムシ思想から、十分な価値をひきだすためには、主著である『獄中ノート』の体系的な全容解明が必要不可欠である。イタリアにおける1975年の校訂版『獄中ノート』<sup>(3)</sup>の出版は、こうした本格的な研究を可能にするものであり、それ以後さまざまなアプローチが試みられているが、研究はまだ緒についたばかりの段階にある。『獄中ノート』全容解明という困難な課題に取り組むためには、そのベースをなしている哲学論を解明することが根本的に重要な意味をもつと思われる。

筆者はこうした問題関心から、『獄中ノート』の哲学論を、その形成過程に焦点をあてることによって読み解こうと試みてきたが、本稿はこれまでの一連の研究、「グラムシと自立的文化の模索—『獄中ノート』第4ノートの構造」<sup>(4)</sup>、および、「グラムシにおける歴史主義の形成—Q7哲学メモの展開(1)~(3)」<sup>(5)</sup>の続編に位置するものであり、第8ノート「哲学メモ。唯物論と観念論。第3シリーズ」の執筆過程をたどりながら、グラムシ独自の「実践の哲学」(広義にはマルクス主義、狭義にはマルクス主義哲学をさす)の特質を解明しようとするものである。

## 1、第8ノート「哲学メモ」の位置

『獄中ノート』における哲学的考察は、2つのテーマ別「特別ノート」、すなわち「ベネデット・クロウチェの哲学」と題する第10ノートと、ブハーリンの『史的唯物論—マルクス主義社会学の民衆用教程』(グラムシは『民衆教程』と略称する)その他を扱った第11ノート<sup>(6)</sup>に集中してみられる。ここに収録された草稿は、そのうちの1つ<sup>(7)</sup>をのぞいたすべてが、単次執筆のB稿と、先行するノートに収録された初稿(A稿)に加筆修正をほどこした改訂稿(C稿)であり<sup>(8)</sup>、加筆前のA稿は、そのほとんどが第4ノートの「哲学メモ、唯物論と観念論。第1シリーズ」、第7ノートの「第2シリーズ」、

第8ノートの「第3シリーズ」に収録されていたものである。

本稿で検討する第8ノート「哲学メモ、唯物論と観念論。第3シリーズ」は、第7ノートの「第2シリーズ」に後続し、それに続いて第10ノートの執筆が、ついで第11ノートの執筆が開始される<sup>(6)</sup>。哲学関連ノートの執筆時期をまとめた表1をみると、第8ノートから第11ノートにいたる哲学関連の考察は、「グラムシの健康状態にとって最悪の2年間」<sup>(7)</sup>といわれる時期にあって、かなりの急ピッチで進められたことがわかる。校訂版「獄中ノート」の編者ジェッラッターナは、「獄中ノート」執筆過程を3段階に区分しているが、1931年終わりから1933年終わりまでのこの時期を、第2段階として区分し(Q8～Q17)、第8ノート冒頭に記されたあらたな執筆構想である「Q8プラン」にしたがって、これまでに書きためてきたノートの再編作業(4冊のテーマ別「特別ノート」執筆)にともなった理論的練成作業がおこなわれた重要な時期と位置づけている。

表1

Q4「哲学メモ。唯物論と観念論。第1シリーズ」§§1A～48A：1930年5月～10月ないし11月。
Q7「哲学メモ。唯物論と観念論。第2シリーズ」§§1A～48B：1930年11月～31年11月。
Q8「哲学メモ。唯物論と観念論。第3シリーズ」§§166B～240A：1931年11月～32年5月。
Q10I「B.クロウチェ論のための参照点」§§1C～13C：1932年4～5月ごろ。
Q10II「ベネデット・クロウチェの哲学」§§1B～61C：1932年4月～33年2月ないし5月。
Q11「歴史的・批判的性格のメモと引用」§§1C～11C：1932年。
Q11「哲学・文化史研究の入門書のためのメモ」§§12C～70C：1932年6月ないし7月～32年末。

(Q○はノート番号、§○は各ノートに収録された草稿番号をあらわし、Aは第1次執筆の草稿、Bは単次執筆の草稿、Cは第1次執筆に加筆した改定稿に付された記号である)。

このQ8プランにおいては、「獄中ノート」執筆着手した当初に記した「Q1プラン」には存在しなかった「哲学研究入門と社会学の一般向け論述に坎する批判的覚え書」というテーマが登場し、第4ノートにはじまる哲学研究シリーズの、第11ノートへの再編・収録作業を予告するものになっている。しかし、第8ノートの後半部分にさしかかって急増するクロウチェ論についてはQ8プランに含まれておらず、これをどうみるか、たとえばQ8プランからの分岐の進行の結果とみるべきかどうかなど、2つのプランのあいだの変

表2：Q8「哲学メモ。唯物論と観念論。第3シリーズ」目次

§ 166B	グラツィアデーイ	
§ 167A	ド・マンの著書	→Q11 § 66C
§ 168A	アントニオ・ラブリオーラとヘーゲル主義	→C稿は未刊行
§ 169A	理論と実践の統一	→Q11 § 12C
§ 170A	科学的イデオロギー	→Q11 § 36C
§ 171A	「民衆教程」について。専門用語とその内容の問題。	→Q11 § 16C
§ 172A	文献目録	→Q11 § 3C
§ 173A	「民衆教程」について	→Q11 § 13C
§ 174A	「民衆教程」について	→Q11 § 14C
§ 175A	ジェンティーレ	→Q11 § 13C
§ 176A	「あたらしい」科学	→Q11 § 36C
§ 177A	「客観的」実在	→Q11 § 17C
§ 178A	ジェンティーレ	→§ 221とともにQ11 § 6C
§ 179B	倫理国家と文化国家	
§ 180B	過去と現在。偉大な理想	
§ 181A	フランスにおけるヘーゲル主義	→Q11 § 4C
§ 182B	構造と上部構造	
§ 183A	弁証法	→Q11 § 41C
§ 184A	形式論理学	→Q11 § 40C
§ 185B	国家の経済的一同業組合的段階	
§ 186A	「民衆教程」について	→Q11 § 14C
§ 187B	知識人	
§ 188B	知識人。文化生活の組織化	
§ 189A	形式論理学と方法論	→Q11 § 42C
§ 190B	国家概念	
§ 191B	ヘゲモニーと民主主義	
§ 192A	独創性と知的秩序	→Q11 § 55C
§ 193B	都市と農村の関係	
§ 194A	形式論理学	→Q11 § 43C
§ 195B	「社会はその解決のための物質的前提が存在しないような問題を提起することはない」という命題について	
§ 196A	「民衆教程」	→Q11 § 15C
§ 197A	「民衆教程」	→Q11 § 15C
§ 198A	実践の哲学	→§ 231とともにQ10 I § 31C
§ 199A	理論と実践の統一	→Q11 § 54C
§ 200A	アントニオ・ラブリオーラ	→Q11 § 1C
§ 201A	「民衆教程」。アルテ（芸術）について	→§ 214とともにQ11 § 19C
§ 202A	「民衆教程」	→Q11 § 15C
§ 203A	歴史と反歴史	→Q10 II § 28C
§ 204A	哲学研究入門	→Q11 § 12C
§ 205A	機械的決定論と行動一意思	→Q11 § 12C
§ 206A	ランゲの唯物論の歴史	→Q11 § 16C
§ 207A	専門用語の問題	→§ 234とともにQ11 § 50C
§ 208A	国民文化の「相互」翻訳可能性	→Q11 § 49C

- § 209A 宗教、賭け事と民衆の阿片 →Q16 § 1C
- § 210A 歴史と反歴史 →Q10 II § 28C
- § 211A 「唯物論」の語 →Q11 § 16C
- § 212B 経済学史研究
- § 213A 哲学研究入門 →Q11 § 12C
- § 214A 「民衆教程」。倫理学と文学批判の手がかり→ § 201とともにQ11 § 19C (後半B稿)
- § 215A 「民衆教程」。外界の實在 →Q11 § 17C
- § 216B 経済学メモ。ウーゴ・スピリトとC (クローチェ)
- § 217A 外界の客観性 →Q11 § 17C
- § 218A アレッサンドロ・レーヴィ →Q11 § 2C
- § 219A 「民衆教程」。形而上学の残滓 → § 232とともにQ11 § 18C
- § 220A 哲学研究入門 →Q11 § 12C
- § 221A ジェンティーレ → § 178とともにQ11 § 6C
- § 222A 哲学研究入門。歴史的諸事実における規則性と法則概念 →Q11 § 52C
- § 223A クローチェとロリア →Q10 I § 13C
- § 224A 神学—形而上学—思弁 →Q10 I § 8C
- § 225A B.クローチェ論のための論点 →Q10 I サマリー— § 6 C
- § 226A 太ったミネルヴァ →Q10 I § 13C
- § 227A クローチェ論のための観点 →Q10 I § 7C、13C
- § 228A 宗教、賭け事と民衆の阿片 →Q16 § 1C
- § 229A 「民衆教程」 →Q11 § 15C
- § 230A 宗教、賭け事と民衆の阿片 →Q16 § 1C
- § 231A 哲学研究入門。構造と上部構造の関係 → § 198とともにQ10 II § 31C
- § 232A 「民衆教程」。過去の哲学の評価 → § 219とともにQ11 § 18C
- § 233A クローチェ論のための観点 →Q10 I § 5C、 § 7C
- § 234A 「見せかけ」と上部構造 → § 207とともにQ11 § 50C
- § 235A 哲学研究入門 →Q11 § 51C
- § 236A クローチェ論のための観点 →Q10 I § 9C
- § 237A 哲学研究入門 → § 128とともにQ11 § 52C
- § 238A 哲学研究入門。思弁哲学 →Q11 § 53C
- § 239A 「民衆教程」。目的論 →Q11 § 35C
- § 240A クローチェ論のための観点。倫理的—政治的歴史か思弁的歴史か? →Q10 I § 13C

\* 矢印以下は再録先をあらわす。

更と『獄中ノート』のその後の展開にみられる変容をどう関連づけるか(「プラン問題」)は、『獄中ノート』全体構造の解明にとってきわめて重要な問題である<sup>(10)</sup>。第8ノートはこうした意味で、『獄中ノート』を読み解く要の位置をしめるといえよう。

## 2、第8ノート「哲学メモ」の展開

「哲学メモ」第3シリーズは、表1からわかるように、1931年11月から1932年5月にかけて執筆されたと考えられており、その内訳は表3のようになっている。

表3

§ § 166B-176A :	31年11月
§ 177A :	31年11・12月
§ § 178A-193B	31年12月
§ § 194A-199A	32年2月
§ § 200A-212B	32年2・3月
§ § 213A-220A	32年3月
§ 221A	32年3・4月
§ § 222A-236A	32年4月
§ § 237A-240A	32年5月

ここで、第8ノートの展開の概略を述べておこう。§ 222A「哲学研究入門」までは、その改定稿のほとんどが第11ノートの「哲学・文化史研究の入門書のためのメモ」であることからわかるように、ブハーリンの『民衆教程』（日本では『史的唯物論』と訳されている）批判や「科学」概念の検討を中心としている。はじめに、理論と実践の統一など、第7ノートから連続する機械論的唯物論克服の課題に関連した草稿があらわれたのち、§ 179B「倫理国家と文化国家」から§ 193B「都市と農村の関係」にいたるまで政治的観点からの考察がつづく。のち、§ 194A「形式論理学」で再びブハーリン批判を中心とする哲学的諸問題にかんする議論が行われ、204A「哲学研究入門」でこれまでの哲学論を第11ノートにまとめるさいの執筆構想が提示される。こうした過程を通じて「史的唯物論」という語の「実践の哲学」へ置き換えが進行していくが、§ 223A「クローチェとロリア」で執筆はあらたな局面をむかえる。Q10 I「B.クローチェ論のための参照点」に収録されるクローチェ論の執筆が集中的に開始されるのである。そして後続する§ 225A「B.クローチェ論のための論点」以降の諸草稿で、クローチェ研究の具体的な論点があげられ、クローチェ論の独立論題化の方向性が提示される。それでは以下に、各草稿を検討していこう。

## 2-1 ロリア主義批判から理論と実践の統一へ (§ § 166B, 167A, 168A, 169A)

第8ノートの「哲学メモ」シリーズは、グラツィアデーイやド・マンといった、グラムシが「ロリア主義」（アキッレ・ロリアに代表される知的秩序の欠如した知識人にたいしてグラムシがあたえた呼び名）の範疇で括って批判した知識人にかんする考察から書き起こされている。グラツィアデーイについては先行する第7ノートにおいて、価値論理解の誤りが問題にされていたが、冒頭の§ 166B「グラツィアデーイ」でも同様の論点からの簡単な指摘がなされている。

§ 167A「ド・マンの著書」では、Q7 § 32B「アンリ・ド・マン」でその実証主義的影響を批判された『労働のよろこび』という著書に言及し、マルクス『経済学批判』序言の「人間はその社会的地位についての意識を、上部構造の領域 (terreno) で獲得する」に依拠せねばならないとコメントしている。この定式は、グラムシのいう「実践の哲学」（マルクス主義）の特質である構造（土台）と上部構造の弁証法的統一を表現するばかりでなく、哲学－政治の歴史化過程を説明する定式として位置付けられており、つづく一連の諸考察の出発点を確認するものとなっている。

Q8 § 168A「アントニオ・ラブリオーラとヘーゲル主義」は、以下の数行からのみ構成される短い草稿である。

「ラブリオーラは、ヘルベルトと反ヘーゲル主義の立場から出発することで、史的唯物論に移行した、というものとして研究しなければならない。要するに、ラブリオーラにおける弁証法として研究すべきである」(p.1041)。

これだけではわかりづらいが、実証主義的、機械論的マルクス主義に欠如している弁証法的特質の重要性を指摘していると解釈すれば、次の§ 169A「理論と実践の統一」への展開が無理なく理解できる。

理論と実践の統一の問題は、Q4 § 38A「構造と上部構造の関係」における、経済－哲学－政治の必然的相互連関についての指摘いらい、グラムシのマルクス主義において、その特質を規定するものとして、重要な位置をしめている。それはQ7 § 35B「唯物論と史的唯物論」において、史的唯物論の「実践の哲学」としての再定義となってあらわれる。同草稿でグラムシはこう述べていた。

「こうして、『哲学と政治』、思想と行動との同等性、あるいは等価に、すなわち実践の哲学にたつする。…唯一の哲学は進行しつつある歴史であり、生それ自体である。ドイツ古典哲学の継承者であるドイツ・プロレタリアートという〔エンゲルスの一引用者〕テーゼは、この意味で理解されうるし、またイリイチ〔レーニン一引用者〕のなしとげたヘゲモニーの理論化と現実化は、ひとつの偉大な『形而上学的』事件であったと主張することができる」(p.886)。

第7ノートで論じられた哲学-政治の歴史化は、Q8 § 169「理論と実践の統一」においては、労働者の意識と行動に則してよりいっそう具体的に論じられている。労働者はかならずしも、世界を変革することとその理論的意識とのあいだを統一してはいない。しかしかれらは、「世界の実践的変革において、自分の行動を全共同者と現実的に統一」(p.1041)し、政治-ヘゲモニーの局面を通過することによって、ヘゲモニー勢力の一方にあるという意識(政治的意識)を獲得していく。この政治的意識は、したがって、「理論と実践の統一の最初の局面」であり、「歴史的な生成」である(p.1042)。かくしてヘゲモニーの概念と事実、理論と実践の統一、構造と上部構造の統一を表現し、それゆえに「偉大な『哲学的』進歩」(同)をも表現しているとされるのである。この歴史的生成過程は現実には「知識人の前衛の創出」(同)としてあらわれ、労働者は「あたらしいインテグラルで全一的な(totalitaria)知性の練成者」(同)である政党によって自己を組織化してゆくとグラムシは述べている。みられるように、理論と実践の統一問題は、「歴史的生成」としてとらえられ、「知識人問題の一局面として提起」(同)されるにいたっている。

## 2-2 主観主義的實在論と常識の世界観 (§ § 170A, 171A, 173A, 175A, 176A)

§ 170Aにはじまる一連の草稿では、第4ノート以来の主観主義的實在論批判がひきつづきおこなわれている。§ 170A「科学的イデオロギー」は、人間のからだから物質のない空間をとりのぞいて圧縮すれば人間は粒子ほどになってしまうというエディントンの説をとりあげ、主観主義的實在論者たちは、こうした「ことばの遊び」にすぎないものを實在としてとらえている



と批判する。いわく、この圧縮が全世界的におこなわれた場合には、すべての人間が様に小さくなるため世界はなににも変わりはないのである、と。

この問題は、つづく§176A「『あたらしい』科学」において、観察主体と対象との関係の考察に引き継がれる。そこでは、現象は観察主体から独立して存在するものとしてはとらえない、とするボルジェーゼの説についてこう述べられている。

「もし、[問題の] 極微の現象が、『観察主体から独立して存在するものとみなされない』ということが正しかったとすれば、それらは、『観察されたもの』ではなく、『創造されたもの』となり、同じく個人的な感覚の支配におちいってしまうだろう。現象ではないこの感覚は、もはや科学の対象ではなく、芸術作品である」(p.1048)。

こうした議論は、レーニンの『唯物論と経験批判論』におけるマッハ主義批判を想起させる<sup>(11)</sup>。グラムシは政治的にはレーニンを非常に高く評価していたが、その哲学に関してはほとんど注意をはらっておらず、『唯物論と経験批判論』については論争的な目的で執筆されたものとして扱うという立場であって、不正確さにかんする留保はしつつも、論争自体のもつ政治的重要性は認めていた。このこともあって、従来、グラムシはレーニンとはまったく異なったマルクス主義哲学理解をおこなったというように理解されてきたし、とくにグラムシの哲学論の評価をめぐる論争的なトピックであった現象と認識主体との関係については、観念論におちいっているとしばしば断じられてきた<sup>(12)</sup>。しかし、さきにみたように、グラムシが観察主体から独立した現象をみとめない主観主義的实在論を「新しい形態のソフィズム」としてしりぞけ、現象は主観から独立して存在するという見地から出発している点に、まずもって注意がはらわれなければならない<sup>(13)</sup>。この命題をみとめたうえで、「常識」の世界観である素朴实在論をしりぞけつつ、主観と客観の関係付けがなされてゆく<sup>(14)</sup>。

常識の世界観は、過去の宗教や哲学などの無批判的吸収によって形成されているが、ブハーリンの『民衆教程』に典型的にみられるような「機械論的唯物論」もまたそうした考え方を無自覚的に受容している。その好例が素朴实在論である。グラムシは第7ノートの冒頭において、クローチェが前提と

する指導者－高級文化と非指導者－民衆文化の分裂を克服するためには、過去のばらばらな諸要素からなる世界観を、首尾一貫したものに仕上げることでこそが肝要であると述べていた。この任務を担うのが「新しい」知識人であり「新しい」哲学であるのだから（Q8 § 171A）、その課題は、「『非哲学者の哲学』である常識の哲学についての、すなわち、さまざまな社会層によって、無批判的に吸収された世界観についての分析と批判」（§ 173A）にほかならない。

「哲学のフォークロア」としてさまざまなしかたで現われる常識は、諸要素の集積としてのばらばらな性格をおびているが、等質的社会集団の形成には、等質的、体系的な哲学の仕上げがともなわなければならない。そうして形成され、共有された首尾一貫した哲学は、すでに先行するノートでも指摘されていたように、あたらしい民衆の常識となって、運動にたいする確信と粘り強さを与える。

「マルクスが『民衆の信念の有効性』について指摘するとき、『民衆の信念の堅固さ』と人間の態度を規制する（regolare）さいの信念の効果を示すために、歴史的－文化的言及をおこなっているのである。しかし暗には、『あたらしい民衆の信念』、したがってあたらしい『常識』の、したがって新しい文化あるいは哲学の必要性を言っているのである」（§ 175A, p.1047）。

ここで興味深いのは、「常識」が人間の態度を「規制する」（regolare）ものとしてとらえられている点である。「規制する」という語は、グラムシの将来社会構想をしめすソチエタ・レゴラータ（società regolata）のレゴラータと同じ語であり、そこからすれば、階級分裂を克服したのちのソチエタ・レゴラータは、首尾一貫した哲学－世界観－常識の獲得によって各自が自らの態度や行動を「規制する」、そういう社会ということになる。

## 2-3 主観と客観の関係（§ § 171A, 174A, 177A）

さて、主観主義的実在論と素朴実在論とともに批判するグラムシは、§ 177A「『客観的』実在」において、主観と客観を次のように関係づけている。「『客観的』とはどういう意味か。人間的に客観的、したがって人間的に『主観的』を意味するのではないか。ならば、客観的とは、普遍的に主観的

を意味するだろう。すなわち主体は、統一的文化体系に歴史的に統一化されたすべての人類にとって、認識が現実的であるかぎりにおいて客観的に認識するのである。したがって客観性のためのたたかいは、人類の文化的統一をめざす闘いである。この統一化過程は主体の客体化過程であり、それによっていっそう具体的普遍に、歴史的に具体的な普遍になっていくのである。経験科学は、こうした客観化が最大限現実達成する領域である。それは、人類の統一化に最も貢献した文化的要素であり、もっとも客観化され、具体的に普遍化された主観性である」(pp.1048-1049)。

先行するQ4 § 41A「科学」やQ7 § 25A「実在の客観性」においてもグラムシは、現実世界で活動している人間との関係を捨象した純粹に客観的な実在なるものは否定していた。第8ノートではさらに進んで、「客観性」が、歴史や人間をはなれた、なにか固定的なものではなく、文化的統一をめざす歴史的運動のなかで現実化していくもの、「生成」として再把握されており、歴史主義のよりいっそうの深化をうかがわせるものとなっている。またグラムシは、「客観性」と「主観性」を機械的に分断する二元論をしりぞけ、「普遍化された主観」という客観概念を提起しているが、これこそグラムシがヘーゲルから継承、発展させようとした考え方であろう。つづいてグラムシは、ブハーリンに代表されるような機械論的唯物論の客観概念を批判しこう述べる。

「俗流唯物論哲学の客観的という概念は、人間を超えて、人間をはなれて認識されうるひとつの客観性を意味しようとしているように見える。それは、神秘主義と形而上学のつまらぬ一形態にすぎない。あるものが、人間が存在しなくても存在すると言うときには、比喩をおこなっているか、神秘主義におちいつているのである。われわれは諸現象を、人間との関係で認識するのであって、人間はひとつの生成であり、認識もまたひとつの生成であり、客観性もまた生成であり、などである」(p.1049)。

ここで『唯物論と経験批判論』のレーニンとの違いは歴然となる。レーニンは、「人間にも人類にも依存しないような」<sup>(15)</sup>客観的真理を認めているからである。しかしレーニン自身も述べているように、「人間の実践は唯物論的な認識論の正しさを証明する」のであって、「認識論上の基本問題を実践

からはなれて解決しようとする試みは『スコラ学』であり、『哲学的妄想』である」<sup>(16)</sup>だとすれば、「人間をはなれた」真理を認めることもまた、「スコラ学」とは言えないだろうか。

ともあれ、人間との関係で、弁証法的に生成する歴史的運動のなかで「客観性」を位置づけることは、§ 174A『民衆教程について』でも指摘されているように、ブハーリンに代表される機械論的唯物論がなしえなかった点であり、「クローチェが観念論の観点から取り組んで解決しようとした問題に、史的唯物論の観点から取り組んで解決する」という課題へのグラムシのアプローチを示すものである<sup>(17)</sup>。

以上のように伝統的唯物論がはらむ問題の検討がすすむなかで、§ 171A「『民衆教程』について。ノーマンクラトゥーラ（専門用語）とその内容の問題」では、「古い知性をその表現とする古い集団の残滓」を克服した「あたらしい知識人」を形成するという課題との関連で、「新しい哲学」が論じられる。

「哲学の専門用語（ノーマンクラトゥーラ）の問題は、いわゆる『能動的かつ受動的』である。超克されたある知性についての、ある概念の表現を受け入れるだけでなく、内容もまた受け入れる一方で、過去の別の知性についての表現は拒否するのである。たとえ、それが内容を変えて、あらたな歴史的・文化的内容を、的確に表現するようになったとしても拒否するのである。こうして、『唯物論』の語によって、過去の内容とともに受け入れられたものが、かつてそれが持っていた特定の歴史的・文化的内容のために、『内在性』の語によって拒否される、ということが生じた」(p.1044)。

こうした問題意識は、唯物論という語そのものの検討をうながし（§ 206A「ランケの唯物論の歴史」、§ 211A「『唯物論』という語」）、その結果、「史的唯物論」の語の「実践の哲学」への置き換えが進行していくことになる。

ところで、グラムシはこれまでに幾度も「あたらしい文化」という言葉を使っているが、その「あたらしい」文化の形成は、現実には支配階級の側からなされる文化の組織化との対抗関係において、ヘゲモニー闘争として展開される。つぎの政治学領域の諸問題を論じた単時執筆のB稿群は、そのあた

らしい文化をヘゲモニー論の脈絡にすえて考察するものである。

#### 2-4 ヘゲモニーと集团的意志形成 (§ § 179B, 180B, 185B, 190B, 191B, 193B, 182B, 195B)

§ 179B「倫理国家と文化国家」は国家の教育的機能について論じた草稿である。住民に一定の教育をおこない特定の文化を広めていくということは、どの国家もおこなっていることである。その意味では「どの国家も倫理的である」。その文化水準は、生産諸力の発展に照応し、したがって、支配階級の利益に照応したものであり、学校と裁判所が国家の教育的機能を代表するものである。しかし、この目的にもっともかなっているのは、「いわゆる私的なイニシアティヴ」であって、これが支配階級の政治的・文化的ヘゲモニー装置を形成しているのである (p.1049)。そしてこの機能、すなわち「文化生活の組織化」 (§ 188B) 機能を担っているのが知識人であり、正当にもヘゲルはそれを看破していた (§ 187B) とグラムシは述べている。この知識人の機能は、カウンターヘゲモニーの側からすれば、構造の矛盾についての意識を上部構造に練り上げて集团的意志を形成するということである。§ 182B「構造と上部構造」はこう述べる。

「構造と上部構造とは一つの「歴史的ブロック」を形づくる。すなわち上部構造の矛盾にみちた複雑で矛盾にみちた総体は、生産の社会的諸関係の総体の反映である。そこから、以下のことが引き出される。すなわち、トータルな (totalitario) イデオロギーの一体系だけが、構造の諸矛盾を合理的に反映し、実践の転覆のための客観的諸条件の存在を表現しているということである。もしイデオロギー的に100パーセント等質的な社会集団が形成されるならば、それはこの転覆のための前提が100パーセント存在しているということ、いいかえれば『合理的なもの』が実際に現実的であるということの意味している。推論は構造と上部構造とのあいだの必然的相互関係 (まさに現実の弁証法的過程である相互関係) にもとづくのである」 (p.1051)。

すでにQ7 § 20A「『民衆教程』」で指摘されていたように、「歴史的ブロック」はマルクスの『経済学批判』序言の命題に依拠して検討されるべき問題である。そこで、この命題「社会はその解決のための物質的前提が存在しな

いような問題を提起することはない」 (§ 195B) に依拠しながら、グラムシは集団的意志形成の問題に接近しようとする。「永続的な集団的意志がどのように形成されるか、またその意志が、自己の直接間接の具体的目的、すなわちひとつの集団行動路線をどのように提起するか」を解明しようとするのである。

「集団的意志を形成する歴史過程の最初の段階では、ユートピア的理想や、混合した合理主義的イデオロギーも重要性をもっている。ユートピア、すなわち抽象的合理主義は、継起する経験の蓄積を通じて歴史的に仕上げられたふい世界観と、おなじだけの重要性をもっている。重要なのは、新しい歴史局面の最初の代表者たちが、こうしたイデオロギー総体を服従させる批判である。この批判を通じて、古いイデオロギーに属する諸要素がもっていた相対的な重みのなかに、ひとつの区別と変化の過程が生じる。かつては二次的であり、従属的であり、偶然的でさえあったものが、主要なものとしてとりあげられ、イデオロギーと学説の新しい総合体の中核となる」 (p.1058)。

グラムシは現時点を「集団的意志を形成する歴史過程の最初の段階」にあるとみなしており、古いイデオロギーの批判による区別化過程の促進を提起している。この確認は、グラムシを再び、『民衆教程』にみられる無自覚的な古い要素の批判に向かわせることになる。

## 2-5 『民衆教程』批判 (§ § 196A, 197A, 186A, 201A, 202A)

§ 196A 「『民衆教程』」もひきつづき区別にかんする指摘である。「集団的なものになり一つの社会的要素、一つの社会的力になった諸見解の総体」と対決しようとする場合には、その誤りを証明するとともに、擁護されている考えは保持するという「区別」の精神が重要であるとグラムシは主張する。

つづく § 197A 「『民衆教程』」では、Q4 § 23A 「『民衆教程』と社会学的法則」より継続されている、ブハーリンの法則概念批判がおこなわれる。ブハーリンは歴史にたいして自然科学法則を適用する実証主義的法則概念を有している。しかし歴史的イベントについては、「予見可能なのは闘争だけであり、たえず変動している諸力の均衡から生じ、固定的な量には還元しえないその具体的なモメントではない」。 (p.1059)。弁証法が欠如し、因果論的機械論に

おちいつている『民衆教程』では、因果性の法則、抽象的分類、社会学などが、弁証法にとってかわっているのである（§ 186A『『民衆教程』について』）。グラムシはそれを「実証主義的アリストテレス主義」、「すなわち、自然科学の方法にしたがった形式論理学のアレンジ」（p.1054）であると断じる。「『観念論』が精神のアプリオリなカテゴリーの学問であるならば、すなわち反歴史的抽象の一形態であるとするれば、この民衆教程は、経験論的ならびにアプリオリで抽象的なカテゴリーが精神のカテゴリーにとってかわっているという意味で、裏返しの観念論である」（p.1054）。

こうした混乱にたいしては、方法論の問題もふくめた「科学」の概念を確立すべきであると主張している（§ 202A『『民衆教程』』）。

（次号につづく）

#### 註

\* 本稿は、科学研究費（課題番号14710019）にもとづく研究である。なお、紙数の関係で、上下2回に分けて掲載する。

（1） 獄中でのノート執筆とその後の出版事情については、Valentino Gerratana, Prefazione, Quaderni del carcere, Edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, Einaudi, 1975, vol. 1, 『グラムシ獄中ノート1』大月書店、1981年、9～47ページ参照。

（2） Antonio Gramsci, *Quaderni del carcere*, Edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, 4vol., Einaudi, 1975. 以下、本文中の引用はすべて同書からのものとし（Qと略）、かっこ内にページ数のみを記す。同書にはグラムシが執筆した全33冊のノートのうち、翻訳練習のみをふくむ4冊のノートを除いた29冊のノートが収録されている。

（3） 『日本福祉大学研究紀要』第98号・第2分冊～文化領域（1998年3月）。

（4） 『季報 唯物論研究』第67号（1999年2月）、第68号（1999年5月）、72号（2000年5月）。

（5） 校訂者 Valentino Gerratana によって、「哲学研究入門」のタイトルが付されている。

（6） Q10II § 21A. のちにQ11 § 12Cに再録される。

（7） Q11は§ § 57B～61Bまでの5アイテム以外はすべてC稿である。

（8） 執筆時期については、各ノートとそこに収録された草稿の執筆時期は、校訂版『獄中ノート』の編集にあたってV.ジェッラッターナがおこなった考証作業に、新たな研究成果を取り入れてG.フランチョーニが作成した一覧表（Gianni Francioni, *L'officina Gramsciana*, Bibliopolis, 1984. の140～146ページ）による。

（9） V. Gerratana, Prefazione, op. cit., x x v. 前掲『グラムシ獄中ノート』、27ページ。

（10）『獄中ノート』執筆途中で作成したQ8プラン（ジェッラッターナの1931年末作成説とフランチョーニの1930年末説がある）では、Q1着手にあたって作成したQ1プラン（個別具体的な諸テーマ）には含まれていなかった哲学研究とブハーリン批判、マキアヴェッリ論（政治論）、ルネサンス論が、独立した論題として記されている。そしてこのQ8プランは、獄中第2期で、抽象度の高い理論次元の論稿からなる「特別ノート」の執筆をうながすことになる。

そこから、Q1プランは『獄中ノート』執筆途中で放棄され、Q8プランにとってかわられて、グ

ラムシの探究は理論的抽象化の方向に向かっていく、という展開を読み取れば、第3期のノートは、第1期に執筆した草稿の転写であって、補足的な意味あいのものであり、第2期「特別ノート」こそが、「獄中ノート」の頂点で中心であるということになる（ジェッラッターナ説）。

また、Q8プランにも含まれていないクローチェ論に注目して、第2期をQ8プランからの分岐と第3期ノートにむけての諸論題の再編の時期とみる見方（フランシヨーニ説）もある。すなわち、問題となるのは、Q1プランからの分岐がはじまった時期、Q8プランが第2期のノートにあたえた変容、Q10クローチェ論の位置、Q8プランの性格そのもの、第3期の意義である。

さらにこの論争と関連して、第1期後半の「国家概念の拡張」という新たな展開（その多くがB稿）を、第2期とのかかわりでどう位置づけるか、1930年末のコミンテルンとの断絶がその後のノートに与えた影響をどうみるか、第3期ノートでの展開と第2期ノートをどう関連づけるか、といった問題の解明も必要である。

(11) レーニン「唯物論と経験批判論」においてこう述べている。「もし物体が、マッハがいうように『感覚の複合』であるか、またはパークレが言ったように『感覚の組合せ』であるなら、そこから必然に、全世界は私の表象にすぎない、ということになってくる。こういう前提から出発すれば、自分自身以外の他の人々の存在に到達することは不可能である。これは真正正銘の唯我論である」。『レーニン全集 第14巻』大月書店、39ページ。

(12) 前掲「日本福祉大学研究紀要」第98号、および『季報 唯物論研究』第67号、第68号、72号参照。

(13) レーニンによれば、「唯物論の基本前提は外界の承認、われわれの意識のそのと、また意識から独立した物の存在の承認である」。この規定にしたがえば、グラムシは「唯物論」の立場にたっていることになる。前掲『レーニン全集』90ページ。

(14) §215A「『民衆教程』。外界の実在」では素朴実在論が批判され、§217A「外界の実在」では、その克服に寄与した主観的観念論が再び論じられている。

(15) 前掲「レーニン全集」141ページ。

(16) 同上書、162ページ。

(17) §199A「理論と実践の統一」においても同様の指摘がおこなわれている。そこでは、「真理はそれ自体作為されたものである」というヴィーコの命題について、クローチェが言うような、「認識するとは為すことであり、人は自分の為すことを認識するのである」という観念論的方向ではなく、ヘーゲルに起源をもつ「史的唯物論」の方向を確認すべきであると主張されている。